

おじさん談義

並木せつ子

『佐野洋子；あっちのヨーコ こっちの洋子』（平凡社／2018年）によれば、『おじさんのかさ』には、今私たちが目にしているものとは別に、もう一つの『おじさんのかさ』があったという。佐野洋子が最初に描いた『おじさんのかさ』は出版されなかったのである。この幻の『おじさんのかさ』の原画が佐野の友人の手元に残っていた。同書にはその原画の一部も掲載されている。

最初の『おじさんのかさ』は、主人公の“おじさん”の顔や姿かたちが違っていた。出版社から「主人公が英国紳士風だと売れないから、農協のおじさん風にしろ」と言われたのだそう。だから、山高帽子にコートという服装は同じだが、こちらのおじさんは面長で体全体が細長く直線的、傘を手にしてベンチに座っている場面でも格好がよい。

友人が佐野洋子の部屋を訪ねたとき、佐野は怒って、英国紳士風『おじさんのかさ』の原画をビリビリに破いているところだった。なかなかいい絵なので、友人はまだ破いていない残りの絵を売ってくれるよう懇願し、なかなか承知しない佐野を説得して、やっと「2000円だから3000円だから」売ってもらったという。

その後、佐野は“おじさん”を描きなおし、1974年今の絵の『おじさんのかさ』が出版された。これが農協のおじさん風なのか、私にはよくわからないのだけれど、最初の英国紳士風おじさんと比べると、洋服や帽子は同じでも、今のおじさんのほうが丸顔で足が短い。顔がそのまま胴体につながったようなズングリ体型に、帽子の山の部分や背中までも全体に丸っこい。ベンチに座る同じ場面でも、こちらのおじさんは傘の柄にもたれるように顔をのせていて、英国紳士のようにしゃんと

してはいない。しかし本当に農協風おじさんの絵だから人気でたのか？ 英国紳士では今のように売れなかったのか？ 私には判断がつかねる。

“山高帽子にコート、細長い体躯で足が長い英国紳士”で、自然と頭に浮かんできたのは「あしながおじさん」である（英国ではなく米国紳士だが）。かつて読んだ本に、そんなさし絵がついていたのか、いやにはっきりした画像が浮かんできた。ウェブスター自身が描いたさし絵には、それほどはっきりした紳士像は描かれていない。それにしても英国紳士風の絵が記憶に残っているのだが……。何冊かの『あしながおじさん』を確かめると、やっぱり。ウェブスターが描いた絵の他にさし絵がついている本では、すべて山高帽子にコートの、足の長い英国紳士風おじさんが描かれていたのである。

「あしながおじさん」は自分の名まえを明かさないうま、主人公のジュディ（ジェルーシャ）を大学に入学させてくれた支援者。ジュディは最後まで気付かないが、その支援者は大学生活を送るうちに次第に心ひかれてゆくジャービス（ジャービー）だったという話であるが、それぞれの『あしながおじさん』に描かれたジャービスの絵がなかなか興味深い。

ジャービスはジュディより14歳年上だから32歳くらいのはずだが、1953年刊（講談社・村岡花子訳・生沢朗絵）の絵や、1961年刊（偕成社・中里恒子訳・中山正美絵）の絵では、ジャービスが40～50歳代といってもいいくらいの年齢に見える。これが2010年代の本になると、20歳代か少年か、と見まがうようなジャービスになるのである。

30歳代という年齢から受けるイメージが、50年の間にずっと若返っているのだろう。“おにいさん”“おじさん”“おじいさん”の境界線も上がってきているような気がする。今だったら、最初に描かれた英国紳士風の『おじさんのかさ』の評価も違っているのたかもしれない。
(なみき せつこ)

アフリカの絵本との出会い

～アフリカの絵本ってどんなの？～

田中 史子

はじめに～アフリカ絵本との遭遇

私は富山市で「デフォー」という子どもの本専門の古本屋を開いています。2階は「もるげん」というギャラリーになっていて、2015年秋と2016年春にアフリカの絵本を展示しました。アフリカでも西アフリカのフランス語圏の国々、コートジボワール、ブルキナファソ、ギニア、ベナン、トーゴ、カメルーン、セネガル、マリ、ニジェールの絵本です。

これらの国では本は高価で、図書館の整備も遅れているため本に触れられる子はわずかです。さらにアフリカで売られている本の90%はヨーロッパや北米からの輸入品なので、子どもたちは自分の暮らしとかけ離れた外国の風土や子どもの暮らしを描いた本しか手に取ることができないのです。

そのような状況でもアフリカの子どもたちの暮らしに即し、自国の歴史や文化、風土、ものの見方を伝える本を読んでもらいたいと考える大人達がいて、1990年代以降ようやく現地出版の本が増えてきました。

アフリカ絵本との関わりは、富山県在住のアフリカ文学研究者村田はるせさんとの出会いをきっかけとしています。

デフォーは2015年2月にオープンしましたが、6月にギャラリーを整備し、富山県高岡市在住のドイツ語児童文学翻訳者松沢あさかさんの本の展示会をしました。産経児童出版文化賞大賞受賞作の『絵で見るある町の歴史』（さ・え・ら書房）や『空白の日記』（福音館書店）などの訳者である松沢さんの約40冊の訳業の全てを展示しました。

村田さんはその展示会に来場され「私は珍しいアフリカの絵本を持っています。この会場で展示することができるでしょうか」と相談されたのです。村田さんとは初対面だったので驚きましたが、後日、本を見せていただくと絵の色彩の豊かさと力強さに魅せられました。

デフォーでの展示

2015年11月19日（木）から「アフリカの絵本ってどんなの？」と題して絵本を展示しました。40冊の絵本は、「ヴェロニク・タジョの絵本」、「創作物語の絵本」「家族を語る絵本」「紛争を取り上げた絵本」「伝承・教訓の絵本」「パーニュ



（アフリカの服地）を語る本」「命と性の絵本」「衛生と感染症の

絵本」に分けました。ヴェロニク・タジョはこの分野での先駆的なコートジボワール人作家です。

マスコミ各社に広報して、新聞社、ラジオ局、ケーブルTVなど多くの取材を受け、初日から多数の方のご来場を得ました。

また、展示中の週末は解説会・読み聞かせ会を7日間14回行いました。村田さんが現地で撮影した写真を元に解説し、自身の翻訳した日本語のテキストで読んでくださり、親子連れなどでにぎわいました。解説や絵本の読み聞かせは参加者の年齢層を見て内容や読

み聞かせる本を調整され、毎回好評でした。展示は12月25日（金）まで延長し、県外



からも多くの来場者がありました。

翌2016年4月14日～5月10日に、JICAの後援を得て新たに40冊の絵本を展示しました。第2回は「創作物語の絵本」



「挑戦する子どもたちの絵本」「『ビビはいや』シリーズ」「パーニュ（アフリカの服地）を語る本」「芸術家が挿絵を描いた絵本」「伝承・教訓の本」「命と性の本」に分けました。

1回目、2回目とも本には日本語で内容がわかるキャプションをつけ、本を日本語で紹介する解説冊子も作成しました。

現在は、2階ギャラリー「もるげん」にて29冊のアフリカの絵本を展示しています。

各地の巡回展示

第1回の展示初日に広島県から来場者がいらして、是非広島でもこれらの絵本を展示するよう勧めてくださいました。そこで2016年8月5日から11日に広島県の宮島で、80冊の絵本を展示しました。その後、様々なご協力を得て全国各地で絵本を展示しました。

2016年8月20日～21日

JICA市ヶ谷ビル（新宿区）

2016年11月25日～30日

くずはアートギャラリー（枚方市）

2017年1月16日～27日

金沢大学附属図書館（金沢市）

2017年8月19日～20日

なごや地球ひろば（名古屋市）

2017年11月2日～5日

射水市大島絵本館（富山県射水市）

私はこれらの巡回展に同行し、村田さんの読み聞かせや解説を聞き、来場者の反応を見て、多様なアフリカの文化とアフリカの絵本の魅力をますます感じています。また困難な状況の中でも子どもたちに本を届けたいと願うアフリカの作家、画家、編集者、出版人の苦闘、本に寄せる揺るぎない思いにも心を打たれます。

おわりに

アフリカは遠くに感じるかもしれませんが様々な鉱物資源を通じて、私たちの暮らしと深くかかわっています。そしてアフリカの子どもたちも、日本の子と同じように弟や妹ができて不安を感じたり、乳歯が抜けて悩んだりしています。一方、大人の外国人排斥を止めようとする子どもたちの本もありますが、理不尽を正そうとしたり、逆境を乗り越えようとする子どもの力は万国共通です。

昨年、村田さんの訳でコートジボワールの作家の絵本が日本で初めて出版されました。『アヤンダ おおきくなりたくなかったおんなのこ』は戦争でお父さんを



亡くした女の子が笑顔を取り戻すまでの物語です。近い人を見失った子どもの心の回復は日本にも通じるテーマです。県内では村田さんをお招きして親子読書会も開かれました。村田さんは現在タジヨの小説を翻訳中だそうです。

これからも魅力あふれるアフリカの絵本が日本で紹介されていくことを願っています。（たなか ふみこ：デフォー子どもの本の古本屋）